

北洋材・北欧材

北洋材・北欧材担当：

庄司木材株式会社

庄司 健太郎

・北洋材について

北洋材という呼称は今からおよそ100年前の大正10年～大正13年頃から北海道、樺太、沿海州などを産地とした木材を総称する言葉として一般的に使われるようになりました。それまでは天塩材や北見材など主産地によって呼称を変えていました。北洋材が示す木材は広義では沿海州や樺太より出材するエゾ松・トド松・落葉松(カラマツ)・欧州赤松・紅松やナラ・タモ・カツラ・シナ・カバなどでしたが、一般的には市場流通量の圧倒的多数を占める当時の日本領南樺太のエゾ松・トド松を指していました。当時は外材ではありませんでしたが、内地材とも樹種が全く異なるため移入材として区分されていました。北洋材の前身である北海道材が東京に移入されたのは明治17年(1884年)頃でした。当初は杉が主流でなかなか市場に受け入れられませんでした。価格や安定供給の面で長い時間をかけて次第に浸透し、製材工場の増設の流れに伴い明治後期から大正にかけて徐々に移入量を拡大させていきました。しかしながら、昭和10年には当時の樺太庁が島外移出禁止の方針を打ち出し以降は急減し、昭和14年以降は入荷が全くなかったそうです。そして戦後の昭和29年、清水港への第1船が入荷し、北洋材はソ連材として輸入を再開されました。清水港への入港を皮切りに日本海側や太平洋側の港へも入荷しましたが、立地から主要の揚げ地は富山・新潟・酒田・石川・福井など日本海側が多く、北洋材製材産地となり、内陸各地に送られていました。それから平成7年頃まで日本の北洋材の下地材はエゾ松が多かったと聞きます。平成3年にソ連が崩壊しロシアへと国名が変わりソ連材はロシア材と呼ばれるようになりました。ソ連時代から日本との木材貿易はソ連側の意向で製品を増やしたいとする流れがありましたが、ソ連が崩壊しロシアとなってもこの流れは変わりませんでした。現在輸入しているロシア材の多くはシベリア産の赤松で関東では野緑の40×30のサイズが多いですが、かつて40×30のサ



北洋カラ松

出典：木材図鑑

<http://wp1.fuchu.jp/~kagu/mokuzai/2.htm>



欧州アカマツ

出典：木材図鑑

<http://wp1.fuchu.jp/~kagu/mokuzai/3.htm>

イズは関東ではエゾがメインで、赤松は建築用造作材として使われていたと聞きます。昭和の住宅は和室が多く、当時安価であった赤松は高級品であった杉や檜の代替品として敷居・鴨居・廻縁などの造作材として使われていました。平成に入りロシア材メーカーから赤松の造作材の落としから製材した下地材が輸入されるようになり、品質の良さから次第に市場に浸透していきました。そして住宅の趣向が和室から段々洋室に変わっていき、赤松の建築用造作材の使用が減った事と良材原木の入荷が少なくなったことも合わさり市場から少なくなっていきましたが、下地材は残りました。輸入当初は製材品も未乾燥(GREEN材)でしたがKD材に変わっていき寸法が安定し曲がりも少なくなりました。こうして北洋材市場はエゾから赤松に変わっていきました。しかしながら、現在シベリア産の日本向け赤松良材丸太は年々少なくなってきたと聞きます。今年に入り話を伺いますと、現地製材工場近くの林区の品質の良い木はほとんど切ってしまう日本の求める品質の丸太を切り出すにはさらに奥の林区に入っていく必要があるとの事です。もしこの話が本当だとした場合に今後ロシア現地サイドや日本市場がどのような反応をするのか、問屋としてロシア材で市場にどう応えていけるのか動向を注視していきたいと思えます。

・北欧材について

北欧材は平成に入り輸入量が爆発的に伸びました。平成4年から平成5年にかけて米樺や米松・SPF等米材製品・丸太の供給減少・価格急騰が続き、その代替材として北欧材が注目され始めました。当初は丸太で輸入されましたが輸送中にブルステインが発生し、すぐに乾燥材の製品輸入に切り替えられました。一方、日本では昭和60年頃から住宅のプレカット加工が普及し始めており当初は構造部材の仕口・継手加工のみであったが次第に羽柄材などの加工も可能になっていき、従来大工さんが現場で行っていた部材加工が必要なくなっていきました。その結果、材料に対する寸法精度や割れ・歪みのでない材料を求める動きが急速に高まりました。さらに平成7年の阪神淡路大震災後には住宅に対する耐震性が注目されるようになり、材料に対する要求は厳しくなっていきました。そのような流れの中、北欧材は割安感があり、量的にも安定している上KD化が進んでおり製品の寸法安定が良いだけでなく現地メーカーの徹底した品質管理や工場のJAS取得等日本市場の要望に応え、ラミナーや製材品のシェアを拡大してきました。今ではまた材料の供給だけでなく林業先進国として、木質内装やCLTを活用した中層建築の他、木製サッシやベレットストープ等参考にすべきものが、欧州諸国には数多くあり、なかでもCLTは国産材の活用方法として近年注目されています。欧州諸国と日本との環境や条件は違いますが、材料の輸入だけでなく概念や発想なども積極的に取り入れ、木という循環可能な資源を通してより日本が豊かになればと思います。



ホワイットウッド

出典：木材博物館

<https://www.wood-museum.net/whitewood.php>